

PRIMEQUEST導入事例

富士通株式会社

間接材購買システムを再構築 年間11億円のコスト削減が可能に

富士通は、これまで3つのバラバラなシステムで構築されていた間接材購買システムを「プライムクエストPRIMEQUEST」で統合、2006年6月より稼働を開始した。この間接材購買システムは、事務用品、ネットワーク調達などの間接材調達を管理し、1日に約1万トランザクションを処理する社内の主要基幹システムの1つである。新システムの稼働により年間約11億円のコスト削減を見込む。今後、社内基幹システムの再構築はPRIMEQUESTベースを基本とする方針だ。

国内メーカーにとって製造コストの削減は緊急課題になっている。なかでも総コストのうち大きな部分を占めている購買コスト削減に目を向ける企業が増えてきており、富士通もその例外ではない。

事務用品の購入、設備のメンテナンスといった「間接材購買」の見直しは、グループ会社を含めた調達コストの削減、調達総量の削減(適正化)、調達業務/運用コストの削減という3つを柱とするコスト削減策を立案、2004年より開始した。

効率化の大きな障害になっていた 36の業務プロセスを調査

当時、間接材購買は1500億円以上の規模があり、情報が散在していたため、グループ会社を含めたデータの収集は難航した。購買部門とともに間接材購買の見直しに当たったのは、花岡和彦が率いるコーポレートIT推進本部だ。

「間接材購買の情報は16部門にもわたって散在、どのような間接材をどのくらい購入しているか実態がなかなかつかめませんでした。また、同種の間接材

を複数部門がそれぞれの手続きで別個に購入していたため、効率性が損なわれるだけでなく、重複して不要な間接材を購入するケースもありました。さらに調達戦略をサポートするシステムがないため、購買情報が価格交渉や経営判断などに戦略的に活用できないという問題も抱えていました。調査の結果、業務プロセスは36プロセスもありました」

3システムがバラバラに存在 情報一元管理のためDWH構築から着手

これらの業務プロセスを統一するため、富士通が最初に取り組んだのは、間接材購買に関連する情報を一元管理して全体像を把握できるようにするDWH(データ・ウェアハウス)を構築することであった。「DWHの構築で、各部門に点在していた間接材購買データのコード体系などを統一、これによって部門を横断した購買管理や分析が可能となり、スケールメリットを生かした戦略的な調達や交渉の実現を目指しました」

このDWH構築と同時に進めたのが、間接材購買システムの見直しであった。



富士通株式会社
経営執行役
コーポレートIT推進本部長
花岡 和彦

当時、事務用品などの総務購買はオフコン、通信キャリアへの支出などのネットワーク購買はメインフレームとUNIXサーバ、設備メンテナンスなどの建設購買はPCサーバなどと、それぞれ独自にシステムを構築し、維持・運用をしているという非効率な実態が浮かび上がってきた。加えて、古いハードウェアとソフトウェアの保守サポートの期限は1~2年後に切れることになっていた。こうした事情から富士通は間接材購買システムを全面的に刷新することに決めた。

新しい間接材購買システムの中核として採用したのは、新製品として登場したばかりのPRIMEQUESTであった。

富士通が基幹系システムの1つである間接材購買システムの構築にあえて新製

品のPRIMEQUESTを選択した理由について、花岡は「これまでLinuxで本格的なミッション・クリティカル・システムを構築した事例が殆どなく、当社の事業戦略を考えると実績作りとノウハウの蓄積が強く求められていました」と振り返る。

戦略的視点に立って

LinuxでのMCシステム構築に挑戦

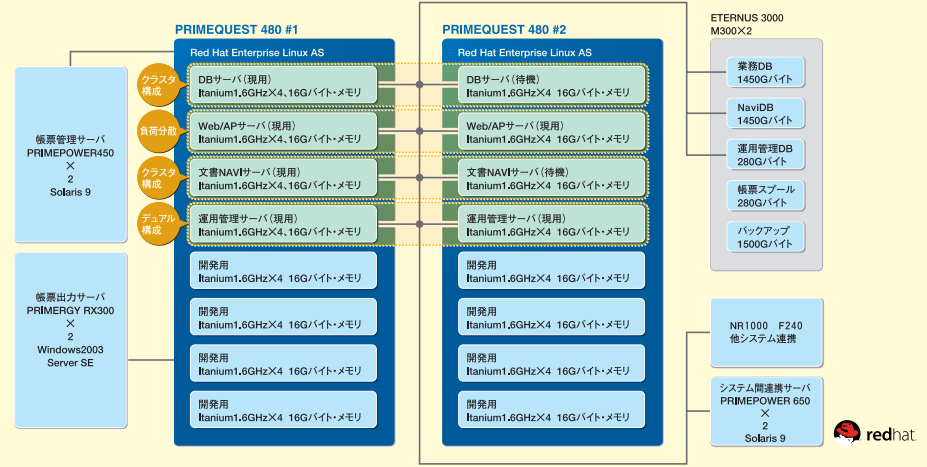
間接材購買システムの統合は、富士通にとってPRIMEQUESTによる社内基幹システム構築として初の案件となる。このため、PRIMEQUESTプロジェクト室をコーポレートIT推進本部内に設置し、事業部門から20人が異動して集中作業を行った。

このプロジェクトは重要な使命を与えられていた。「Linuxでミッション・クリティカル・システムを構築し、TRIOLE構成でトランス・マイグレーション(基幹系システムの移行)をすることにあえて挑むことにしたのです」

新聞接材購買システムは、PRIMEQUEST 480を2台使用してクラスタ構成を採用している(図)。OSにはRed Hat Enterprise Linux ASを採用、8つのパーティションに分割し、各パーティションには4CPUと16Gバイト・メモリを割り当て、DBサーバ、Webアプリケーション・サーバ、文書NAVIサーバ、運用管理サーバを搭載し、残りは開発用として使用する。今後のシステム拡張や他の基幹システムからの移行を考慮に入れた上で、あえて十分すぎるくらいのスペックを用意したという。なお、今回のシステムへの投資額はソフト開発だけで4億円に上る。

間接材購買システムのシステム構成図

従来、オフコンのGPシリーズ、メインフレームのGS/MとUNIX系のDS/90、Windows Serverなど、独自に構築されていた間接材購買をクラスタ構成のPRIMEQUESTに統合。OSはRed Hat Enterprise Linux ASを採用、8パーティションに分割し、各パーティションには4CPUと16Gバイト・メモリを割り当て、DBサーバ、Webアプリケーション・サーバ、文書NAVIサーバ、運用管理サーバを搭載する。パーティションの半数が今後のシステム移行を考慮した開発用としている



これまで個別システムで運用していた総務購買、ネットワーク購買、建設購買という3つの購買機能をPRIMEQUESTに統合し、業務プロセスを統一化(5プロセスに集約)するとともに、マニュアル購買のシステム化も行った。一方、大量の帳票を出力する帳票出力サーバ(PRIMERGY、Windows)と他の基幹システムとのデータ連携を担うシステム間連携サーバ(PRIMEPOWER、UNIX)については、その機能だけに特化しており、安定稼働をしていることからあえてそのまま残している。

購買機能とプロセスを統合 システム稼働の半年前倒し

構築プロジェクトは2005年夏にスタートし、並行して進んでいたDWH構築が同年10月に完了、間接材購買システムは2006年6月に稼働できた。「旧来のCOBOLやC言語で記述された数多くのオンライン・アプリケーション資産をトランス・マイグレーションするには、Topjaxというフレームワークを活用することで開発作業を標準化し、これにより開発生産

性を1.5倍に高められました。また、動作環境が保証されたTRIOLE構成を選択したことにより、構成設計が格段に早くなりました。その結果、稼働開始を当初予定より約半年前倒しすることができました」と花岡はプロジェクトを振り返る。

「新聞接材購買システムの構築では、間接材の調達コストの削減、調達総量の削減(適正化)、調達業務/運用コストの削減という3点を目指してきました。現時点では年約11億円の削減を目標としています。さらにグループ会社への展開を推進していくことで、一段と高い成果を出せるでしょう。業務面の期待効果である調達コストの削減だけでなく、運用面での効果も狙っています。前システムはシステムごとにOSが異なり、運用が全く違っていました。標準化により運用コストを大きく削減できる可能性があるからです」。

お問い合わせ先

富士通コンタクトライン

0120-933-200

受付時間 9:00～17:30(土・日・祝日・年末年始を除く)

富士通株式会社

〒105-7123 東京都港区東新橋1-5-2

汐留シティセンター